

斗柄舎内部資料(TIS01001)

遁甲挨星法概説

2004/11/11

北斗柄

はじめに

遁甲挨星法は、透派奇門遁甲の全伝継承者である内藤文穩公が、透派奇門遁甲にあき足らず奇門遁甲や風水を探求した結果として創出された術である。本稿では内藤公の遁甲挨星法を解説するとともに、その基本原理から導き出される多様な遁甲挨星法について述べる。

キーワード：気学、九星術、紫白星、天禽、五黄、寄宮、挨星、挨星卦、遁甲挨星、超神接気、析補法

挨星法

挨星法は九星術の技法の一つで、本来の紫白星（九星）盤を地盤として、時支のある宮の紫白星を中宮において再度、紫白星を配置して天盤を作成し、天盤地盤の紫白星から大成卦を出し、大成卦の吉凶象意から方位の吉凶象意を読み取る技法である。挨星法によって得られる大成卦を挨星卦とよぶ。

具体的に挨星卦を出すためには、まず後天八卦と先天八卦の配置、洛書の魔方陣を知る必要がある。

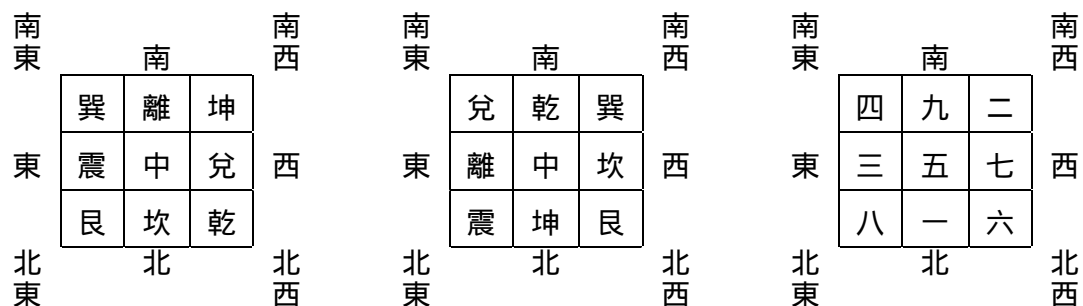


図 1. 後天八卦配置.

図 2. 先天八卦配置.

図 3. 洛書魔方陣.

後天八卦においては図のように、北に坎、北東に艮、東に震、南東に巽、南に離、南西に坤、西に兌、北西に乾の八卦がそれぞれ配置されている。方位についての術は通常この後天八卦を基本としているため、注釈無しで艮方というと北東の方位を

意味しており、そのため北東を艮宮とよぶことがある。図3は洛水に現れた神亀が甲羅に背負っていた模様から作成されたという伝説を持つ、1~9までの数を使った魔方陣で、縦横斜めの3つの数の和が15になる。一が一白水星、二が二黒土星、三が三碧木星、四が四緑木星、五が五黄土星、六が六白金星、七が七赤金星、八が八白土星、九が九紫火星にそれぞれ対応している。これらの星を日本では九星とよぶが、奇門遁甲では天蓬星や天芮星を九星とよぶため混同を避けるために本稿では紫白星というよび方をする。紫白星というのは九紫の紫、一白の白をつないだよびかたで、九~一の星全体を指している。

洛書の魔方陣と後天八卦から、一白水星 - 坎、八白土星 - 艮、三碧木星 - 震、四緑木星 - 巽、九紫火星 - 離、二黒土星 - 坤、七赤金星 - 兌、六白金星 - 乾という対応になる。本来の位置(定位とよばれる)が中央(中宮ともいわれる)である五黄土星は定まった八卦との対応がなく、五黄土星が中宮以外の周囲の八宮に回座したとき、その位置における先天八卦と対応することになる。この対応関係を表1にまとめておく。

表1. 紫白星と八卦の対応.

紫白星	八卦	後天八卦方位
一白水星	坎	北
二黒土星	坤	南西
三碧木星	震	東
四緑木製	巽	南東
五黄土星	先天八卦による	-
六白金星	乾	北西
七赤金星	兌	西
八白土星	艮	北東
九紫火星	離	南

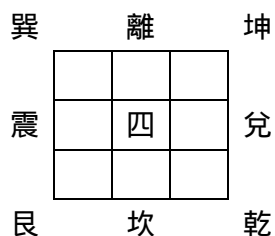


図4. 中宮に配布.

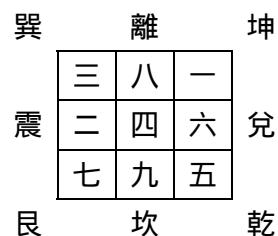


図5. 他星を飛泊.

さて曆などから例えば四緑の年（あるいは月、日、時刻）であることがわかったときには、最初に中央に四緑をおく（図4）。次に洛書の魔方陣に従って乾宮に五黄を、兌宮に六白、艮宮に七赤、離宮に八白、坎宮に九紫、坤宮に一白、震宮に二黒、巽宮に三碧と置いて紫白星の盤を作成する（図5）。この洛書の魔方陣の順に配布することを「飛泊させる」という。胎東気学の系統では飛泊を遁甲とよぶが飛泊が一般的な呼称である。また五黄が乾宮に配布されたことから、中宮四緑のときの五黄は先天八卦に従って艮卦に対応している。

ここまでが一般的な紫白星の盤の作成であるが、挨星法では時の干支の支と紫白星の盤から挨星で中宮に配布する星を割り出す。例えば2005年は乙酉年で四緑の年である。十二支と後天八卦に基づく各宮の関係は、坎宮 - 子、艮宮 - 丑寅、震宮 - 卯、巽宮 - 辰巳、離宮 - 午、坤宮 - 未申、兌宮 - 酉、乾宮 - 戌亥であり、年支の酉に対応するのは兌宮である。図5から兌宮には六白が回座しているので、挨星法では最初に六白を中宮に置く。次に飛泊の順に乾宮に七赤、兌宮に八白、艮宮に九紫、離宮に一白、坎宮に二黒、坤宮に三碧、震宮に四緑、巽宮に五黄を置いて挨星の天盤を完成させる。

巽	離	坤	
	三	八	一
震	二	六	四
	七	九	五
艮	坎	乾	兌

図6. 中宮に配布.

巽	離	坤	
	五	一	三
震	四	六	八
	九	二	七
艮	坎	乾	兌

図7. 他星を飛泊.

地盤の五黄は先天八卦に従って艮卦に対応していたが、天盤の五黄はやはり先天八卦に従って兌卦に対応している。図7から坎宮は天盤二黒で坤、地盤九紫で離であることから地火明夷が挨星卦となる。同じように艮宮は火沢睽、震宮は風地觀、巽宮は沢雷隨、離宮は水山蹇、坤宮は雷水解、兌宮は山天大畜、乾宮は沢山咸がそれぞれ挨星卦である。

遁甲挨星

遁甲挨星では基本の挨星法に奇門遁甲の要素を加味して、挨星天盤の配布順を変えることになる。例えば2003年6月20日の辰刻は、実際の夏至が22日04:12(JST)

であることから、奇門遁甲時盤の局数は陰九局である。このとき奇門遁甲地盤の配布は、

1. 最初に戊儀を洛書魔方陣の九である離宮に置く。
2. 陰遁なので飛泊の逆順に、艮宮に己、兌宮に庚、乾宮に辛、中宮に壬、巽宮に癸と六儀の干を配布する。
3. 次に三奇を配布するがその順は、丁を震宮に、丙を坤宮に、乙を坎宮にという順になる。

癸	戊	丙
丁	壬	庚
己	乙	辛

図 8. 奇門遁甲地盤.

すると図 8 のような盤となる。このとき時の干支は戊辰で、甲子から始まって癸酉で終わる旬の中にいるので旬首六儀は戊である。旬首六儀と時干戊とも中宮ではないので、この場合は基本の挨星法と同じやり方で挨星天盤を配布する。戊辰刻は五黄なので図 9~10 のようになる。

巽	離	坤	
	四	九	二
震	三	四	七
	八	一	六
艮	坎	乾	兌

図 9. 中宮に配布.

巽	離	坤	
	三四	八九	一二
震	二	四五	六七
	七八	九一	五六
艮	坎	乾	兌

図 10. 他星を飛泊.

さて同じ日の申刻は壬申であり時干が中宮に入っている。この場合は例外として、挨星天盤を飛泊とは逆順に配布することになる。壬申刻は一白なので、挨星天盤の中宮は坤宮の七赤となる。配布は図 11~12 のようになる。

巽	離	坤	
	九	五	七
震	八	七	三
	四	六	二
艮	坎	乾	兌

図 11. 中宮に配布.

巽	離	坤	
	八九	三五	一七
震	九八	七一	五三
	四四	二六	六二
艮	坎	乾	兌

図 12. 他星を飛泊.

例外の発生はもう一つある。例えば 2003 年 7 月 15 日の寅刻は小暑下元にあたり陰五局である。奇門遁甲地盤は、

1. 最初に戊儀を洛書魔方陣の五である中宮に置く。
2. 陰遁なので飛泊の逆順に、巽宮に己、震宮に庚、坤宮に辛、坎宮に壬、離宮に癸と六儀の干を配布する。
3. 次に三奇を配布するがその順は、丁を艮宮に、丙を兌宮に、乙を乾宮にという順になる。

己	癸	辛
庚	戊	丙
丁	壬	乙

図 13. 奇門遁甲地盤.

すると図 13 のような盤となる。このとき時の干支は丙寅で、甲子から始まって癸酉で終わる旬の中にいるので旬首六儀は戊である。旬首六儀が中宮で時干丙は中宮ではないので、この場合は例外となる。この丙寅刻は陰遁で丑日の寅刻なので四緑であり、挨星天盤の中宮は艮宮の七赤である。挨星天盤の配布は図 14~15 のようになる。

巽	離	坤	
震	三	八	一
	二	七	四
	七	九	五
艮	坎	乾	兌

図 14. 中宮に配布.

巽	離	坤	
震	八	三	一
	九	二	七
	四	七	二
艮	坎	乾	兌

図 15. 他星を飛泊.

巽	離	坤	
震	一	六	八
	九	二	四
	五	七	三
艮	坎	乾	兌

図 16. 中宮に配布.

巽	離	坤	
震	九	一	七
	八	二	三
	四	六	五
艮	坎	乾	兌

図 17. 他星を飛泊.

さて同じ日の辰刻は戊辰でありやはり甲子からの旬に入っているので旬首六儀は戊であり、旬首六儀と時干の両方が中宮に入っている。この場合は例外中例外とし

て普通に挨星天盤を配布する。この辰刻は二黒であるので、巽宮の一白が挨星天盤の中宮となり、配布は図 16～17 のようになる。

このような作盤方法を持つ遁甲挨星において問題となるのは遁甲曆の問題である。いわゆる透派奇門遁甲の立向盤においては、節気に最も近い甲子刻で換局するという方法を採用しているために、遁甲曆と紫白星の曆で同期が取れていないという問題がある。遁甲挨星の術理の上から内藤公はこの問題を十分に認識していたはずであり、内藤公は以下のような超神接気と十時一局の折衷案を採用している。

- 節気三元は超神接気から割り出す。
- 各節気三元から十時一局で換局して行く。

しかし標準的な奇門遁甲においては一元一局であることを考えるとすぐさま遁甲挨星のバリエーションに思いがいたる。つまり、

- 完全な超神接気の採用。
- 析補法の採用。

といった遁甲局数の採用である。また陽遁と陰遁で非例外時の挨星天盤の配布を変えろというバリエーションも考えられ、高島正龍公はこの方法を採用している。

さらには内藤公の遁甲挨星では八門も要素として含んでいるが、八門の配置において旬首六儀や直使が中宮となった場合に中宮をどこに寄宮させるかでもいくつかのバリエーションが考えられる。以下のようなものである。

- 常に坤宮に寄宮。
- 陽遁時は艮宮、陰遁時は坤宮に寄宮。
- 陽遁時は巽宮、陰遁時は乾宮に寄宮。

などである。内藤公は巽宮と乾宮に寄宮する方法を採用しているが、標準的な奇門遁甲では坤宮への寄宮法が使用されている。

ということで、内藤公が創出した遁甲挨星法からは多様な遁甲挨星法が派生してくる。どのような遁甲挨星を使用するかは読者の判断にゆだねたい。

遁甲挨星で使用できない方位

遁甲挨星で使用できない方位は、地盤五黄、地盤暗剣、破、凶の挨星卦、凶門である。天盤五黄は標準的な奇門遁甲における天禽星と同じ作用とみてよい。